

主イエスによって宣べ伝えられたキリスト教は、最初一つでありました。しかし二先年の歴史の中でキリスト教は多くの教派に分れてしまい、今日に至っています。宗教改革等の歴史を見ますと、教会がその本来の使命を忘れて歩もうとしたことがこの分裂を生み出してしまったと言えそうです。これは主なる神の御心を痛めることに他なりません。

しかし現在では教派を超えた交わりが積極的になされるようになってきました。一九六〇年代中ごろに開催されたローマカトリック教会の第二バチカン公会議では、それまで他教派をいっさい認めない方針だったのが、教派を超えた交わりを積極的になしていくよう方向転換がなされました。私たちの聖公会もローマカトリック教会との一致を目指し、一緒に聖餐式をささげられることを目標に努力が続けられております。また本年より、共通の主の祈りを用いるようになったのは皆様もよくご存知の通りです。

本日の福音書に選ばれておりました個所は、今日たくさんの方々の教派に分れている教会に対して重要な教えを伝えているように思われます。

キリスト教の歩みは、登山にたとえることができます。それぞれ出発点は全く異なっており、相手の気配を感じることも出来ないけれども、到達する目標点是一緒であります。それと同じように、キリスト教の諸教派は今多くに分れてはおりますが目標とする神様は一緒であります。それぞれ強調点や伝統は異なっても、信じる神様は同じであります。二〇世紀は、キリスト教の歴史の中で今までなかったほどの大きな変化のあった時であったのです。現在の二一世紀にはどのような変化が続いていくのでしょうか？。いずれにしましても御心にかなう道を歩むことが出来ますよう祈らねばなりません。

しかし同時に、私たち聖公会が保ってきた伝統や強調点は何だったのかをよく理解している必要があります。教派を超えての交わりが深められたと言っても、自らの立脚点が不明確になってしまっただけは何もなりません。教派を超えての交わりは、それぞれ自分の立脚点を明確にしつつなされる交わりであるのです。

聖公会の創設者は、イエス・キリストです。主イエスが使徒と預言者との基の上に立てられた原始教会が歴史の流れのうちに、伝統と慣習に多少の変化を与えた人物や事件があったにせよ、基本的信仰と職制にはすこしの変化もなく成長し

続けて、現在に及んだのが聖公会なのです。私たちの聖公会は、日進月歩の聖書研究成果を含めてこの方針を保ち続けているのです。例えば、聖餐式において以前司式者が会衆と同じ方向を向いて礼拝していたのが、現在は司式者と会衆が向かい合って礼拝をするようになりましたが、これは初代教会の礼拝が、司式者と会衆は向かい合って礼拝していたのがわかり、このように改められたのです。すなわち聖公会の礼拝は、初代教会の習慣が著しく失われた中世の慣習をなるべく排除し、初代教会の姿に帰ろうとするものであります。私たちの聖公会は、そのようにこれまでの歴史を歩んできたのです。

さて、本日の福音書の後半にはこのようなことが書かれています。

「もし片方の手があなたをつまづかせるなら、切り捨ててしまいなさい。両手がそろったまま地獄の消えない火の中に落ちるよりは、片手になっても命にあずかる方がよい。もし片方の足があなたをつまづかせるなら、切り捨ててしまいなさい。両足がそろったままで地獄に投げ込まれるよりは、片足になっても命にあずかる方がよい。もし片方の目があなたをつまづかせるなら、えぐり出しなさい。両方の目がそろったまま地獄に投げ込まれるよりは、一つの目になっても神の国に入る方がよい」。

これは大変分かりにくい記述であります。この意味することは何なのでしょうか？。

教会は、主イエス・キリストにあって神に生きるすべての人の集まりです。人の集まりですから完全なものではなく、悪い部分もあります。しかし主なる神のもとに生きる集まりである以上、悪いところへの挑戦は常になされ続けなければなりません。ある程度悪いのは仕方がないということとは出来ないのです。

主イエスは、私たちが罪を犯しながらしか生きていけないことをよく御存知でおられます。罪を離れることは大変な努力やエネルギーが必要であることもよく御存知でおられます。それこそこの聖書にあるような、罪を離れるとは、自分の体の一部を切り捨てるようなことであるというわけなのです。

しかし主は切り捨てなさいと言われます。すなわち、私たち一人一人の中の悪い部分に目を向けて、生涯をかけて罪から離れていきなさいと言っているのです。信仰の生涯は、神様の導きに従って罪から離れて御心にかなう者にされていく過程であることをよく心に留めたいものです。